

# 佛教的人間像の時代的性格

佐 古 善 亮

過去、現在、未来という因果關係が、「生き方」の根柢として確立されている。それが人間存在を超えたものにまで、或は人間の一々の自覺にまで考及されようと、起點この三連鎖が道德的な展開をみせるのであり、従つて時代の様相をも帯びて来るのである。

未来衰退、現状維持、未来向上などという断面で仏教の時代的性格を描いて行こうとする動きは、こうした処に生れて来るものであらう。然し人間として誰が現心のままで良いと思ひ、或は未来の衰退をためつけて生きて行けるであらうか。此の疑問に對して、「それが仏への遠近相を表出するのだ」という。もつともらしい言葉ではあるが、こうした動きでの把握は到底その目的を達し得ないものである事を知らねばならない。

「讀せしめられる」とうのとれる「讀じ」即ち仏性の「ひびき」が示す「讀せしめられる」型への「ととのい」は、時代的はものに結びつく時、「彩り」の差のある垂はいうまでもない。強いために「動かされる」型で表面化するものであり、弱い時はより「沈み」としての動きをみせるのであらうと思ふ。これを「仏への遠近相」などと云々するのは解しかねる。こうした動きの根柢をも觀極めてこそ、時代的性格としての把握の糸口が許され、現代のものへの確立が

導かれて来るのだと思う。

思うに「現在」だけが人間に在るのであり、「過去」「未来」は現在の想いとして確立されて来るのであろう。それは並列的な関連関係ではなく、一なる内容としての融合体でなければならぬ。或程「現在」は過去なる因の重なりであらう。しかし「過去」を確立するものは「現在」でなければならぬ。過去の假定的な展開が如何に素晴らしいものであつても、それを「現在」にわり込ます余地のないまでに張りつめた「現在」こそ常に要求されねばならない人間の存在態度ではなからうか。それ故にこそ過去を「過去」として確立し得るのであり、過去は「過去」としてすばらしく、しかも現在の因としての存在を認め得るのである。

「過ぎ去つた」事が「過去」を確立するのではない。「過ぎ去つた」事であつても、「過ぎ去つたもの」を思う假定の展開が現在の自己に割込むなら、とりして、それを「過去」として確立し、「現在」として確立し得よう。「現在」が「過去」の要素でなければならぬ。同じ事が「未来」についても云えよう。「想い」に展開される「未来」。それは「新り」のひびきをそのまゝ、伝える「想い」として充分に価値づけられはするが、唯それだけでは「未来」の確立とはならない。現在なる時代相が主む調和のある「想い」が「未来」を確立する動きとなる。しかしそれが「想い」の先端として存在する限り、「未来」とは云えないので、「現在」の主む「調和された想い」が「現在」を遊離して、「現在」をそのもので、「過去」としての緊張度を示す時初めてそれは「未来」となり得るのである。その中に、「現在」なるものが割り入んで確立されるものでもなければ「現在」を割り込ます余地のないまでのものが「未来」でなければならぬ。そして「未来」も現在の自己を確立するものであり、「現在」という意識が確立する

ものである。

こう考える時、性質に全くとも瞬間的のものではなく、巾と長さをもつたものであると云える。そしてその移ろいを否定するのが人間である事もはつきり認めねばならない。一か故に移ろいとしての展開もあり得るのである。そして人間には「現在」だけが在り得るという事にもなる。その中での「過去、未来」は確立し得ても「過去、現在、未来」と並列的に並べられる。「過去、未来」は人間にはないものである事をはつきり認めねばならない。このようにして、「現在」だけを人間にうち立てる時、人間存在面から瞬間であるとも云い得るであろう。しかし瞬間である故にこそ永遠なのであり、「いついつまでも」の働きをみせるのである。

人間は自己の死を想い、「あしたの露」という型を認識し、経験し、又想いもする。或は自己に認めごせうとし、認めさしたと思う、そして言葉として確立されもする。然し人間自体はそれを吾愛する働きと働きをもつ。現実、非現実との分裂をみるのではなく、現実の中のそうした動作として自己の永遠性を持ち得ればこそ、無常である人間が生きても行け、「何時死しても」のせらぎにまで絶縁可能段階をもつのである。この事は、あきらめや焦慮に似たわけばかりのある言葉としてではなく、本當にすつきりした言葉にまで展開されよう。

それが、「仏性」に対する「我」の一瞬の自覚でもあり、社会即ち時代に対する一瞬の自覚となり、その事が、それ等に対する永遠なる自己展開ともなるのである。

「我」の一瞬の自覚には、所謂「宗教は他人のもの」なる関係である。その事が時代或は社会に対する「我」の一瞬の自覚になる事は論をまたないであらう。然し此処に止つてはならない。「仏性」は「我」の仏性でもあれば「他」の仏性でもある。「そのもの」として何の変りもないも

のが、他我の根柢に在る。それを共通面として立つ他我が、こうした根源的なもので一つであり、「他」と「仏性」とのひびきもあり、如何なる処をくぐり抜けても本質の変化しない仏性が、他を隔して他にひびきもする。その場合こそより仏性としての「ひびき」を強めている事も認めねばならない。

こうした「他」と「他」との関連における「ひびき合い」は、相互に追従を許せないものである事は勿論であるが、「ひびき合い」は「願い」を通じてのものであり、「願い」なればこそ、そして追従を許せないものであるからこそ、「願い」と「願い」相互の「彩り」に現む深い前でのもので激しくぶつかりあつて「願い」と「願い」の共通を要求するのであり、「願い」をもつ「我」が社会従つて時代に立脚せねばならないのである。

「仏性」と「我」の対比だけに止るならば、それは「仏教的人面」の限りに止らねばならない。しかし「仏性」との対比における「我」は、あくまでも時代的に、社会的に調和をみせる我でなければならず、「歡喜」の展開する「あふれ」が、「仏性」に対する「さびしさ」を積むと同時に、共通を要求しつつ他に、従つて社会に、時代に展開されてゆく前に、「仏教的人面像」が確立される。

「仏性」は普遍なるものであるが、かく求めるものが時代と共にある故にこそ、仏教は時代と共になければならぬ。従つて「仏教的人面像」なる表現態度は他を超えたものとしての、社会のものの、民族のものの、世界のものとしての動性を内にもつものでなければならぬ。

こうした前に、「仏教的人面像」としての一点の自覚から展開への姿、即ち時代的性格としての態度の表現が確立されて来るのだと思う。